文才豊かな総指揮官が描いた
あらゆる幕末維新戦記の白眉！

続日本史籍協會叢書

山縣公遺稿・こしのやまかぜ

限定三百部復刻

マツノ書店

内容見本
（原寸大）

告げ直に壇之浦の陣營に歸り乃ち砲隊長等を招き君命を傳へ且つ告げて曰く幕兵の先鋒は已に備前に至ると聞く諸君は宜しく小瀨川口に赴き國の爲めに一戰すべし予は別に思ふ所あり敢て我隊の面目を失はしめずと、然れども諸士は初より予と事を與にするの決心にて敢て予が言に從ふの色なかりし

五日未明に外艦は隊を整へ戸崎の岬より漸次乘込みたり、戸田龜之助は政府の命を以て通譯として外艦に使し已時歸り報じて曰く彼れ鐵團を以て我を饗應すべしと云へり予應じて曰く善し、予は昨夜前田の傳令に接して奉旨の答をなしたれども若し外艦をして無事に馬關の海峽を通航せしめば是れ我が死所を失ふ者なりと覺悟したるに今や戸田の報を聞き宛然蘇生の思を爲して其喜を兵士に告げ勇氣全營に滿ちて軍中肅然たり。正午頃一大軍艦（此軍艦には三層の砲門ありし）より合圖の砲を發するや艦隊は直に前田に向て砲戰を始めたり、我軍乃ち之れに應じて發砲し數時の間は硝煙海を蔽ひたり、其交戰中敵の左翼なる四艘の艦隊は常に壇之浦の砲臺を斜擊し我をして前田に應援するを得ざらしめたり、我も亦壇之浦より敵艦に向て頻に發射し彼我の砲彈中天に飛行し轟々然として大風の怒號するに似たり、而して敵彈の力は最猛烈にして砲臺の左端に接近する所の山崖に打込み土石を迸

散せしめたるの勢大に我兵を窘めたり又敵彈の砲臺の後山に達し樹木に中るや盡く破碎せざるはなく背面の稻田に打込む者は地下幾丈の深處に於て爆炸し土砂稻苗を擧げて一齊に中天に向て噴上げ勢の盡る處よりして稻苗の地に向て飛下するは百千の煙火狼煙を觀るに異ならず劇戰生死の境に在て此奇觀を見るは亦愉快の極なりとす、是時第八砲門の照準手福田某砲後に立ちしが敵の一砲彈我砲身の上面を直過し福田の腹部に命中し全身粉齏となりて空中に飛揚したるこそ慘酷なれ其砲の左右に在りし者は皆空氣壓迫の爲め數尺外の距離に吹飛ばされたり以て敵砲照準の精なるを知れり、晡時に至り前田の營は遂に兵を收む前田に向ひたる敵の艦隊は直に砲臺の前に接近して横に壇之浦を射擊したるを以て我兵益々困み其死傷の多き却て主戰の前田に過ぎたりし、此日洲本の砲臺にては僅に一二回の發射をなしたるに誤て火を硝庫に及ぼして爆發の禍に罹りたれば戰爭の用を爲すこと能はざりし

我已に前田の兵を收めたれば敵も亦稍々艦を纒め退て田之浦に碇泊し軍樂を奏し其聲洋々たり抑も此戰爭に於て我が最も遺憾に堪へざりしは砲臺を田之浦及び門司に有せざりしこと是なり、初め攘夷手始の前に我藩は小倉藩に照會し奉

■驚いたことに、本書はどの頁も皆「内容見本」に使えます。
「どの頁も充実している」のは逆に「選び易くて、選び難い」
ということを初めて教えてくれた記念すべき本でもあります。

山県有朋の奇兵隊史

萩博物館特別学芸員　一坂　太郎

奇兵隊といえば、武士以外の庶民にまで門戸を開いた近代的な軍隊といったイメージが定着している。そのことは、そのまま「開闢総督」の高杉晋作の思想と重なるように思われがちだが、それは違う。奇兵隊史六年半のうち、晋作が直接かかわったのは三カ月ほどだ。しかも藩のエリートだった晋作は、下級武士や庶民が軍事力を背景に政治的発言力を持つことを苦々しく思い、戸惑い続けた。そこが、時代の過渡期を生きた晋作の魅力だ。イデオロギーにまみれた、市民革命の先覚者的な晋作評には、いささか首を傾げたくなる。

奇兵隊を指揮し、幕末史上燦然と輝くまでの存在に成長させたのは、軍監の山県有朋（狂介）の働きによる部分が大きい。動乱の波に乗り、はい上がろうとする下級武士の山県にとり、奇兵隊は強くなければならなかった。それは自身の将来に直結する、切実な問題であった。この点、二十九歳で病没した晋作に対する判官贔屓もあってか、軽視され続けている気がしてならない。

軍国主義の権化のごとく扱われ、悪名高かった山県だが近年、再評価の動きが盛んだ。研究者の世代交代が進んだのも、大きな要因のひとつだろう。もっともそれは明治以降、国家の運命を背負い、現実主義者として舵を切って進んだ山県に対してだが、その出発点はもちろん幕末、奇兵隊における経験であった。

このたびマツノ書店から復刻される山県の遺稿集の骨子となっているのは、『懐旧記事』と『越の山風』だ。

『懐旧記事』は安政五年（一八五八）の上京から慶応三年（一八六七）十一月の奇兵隊出兵までの、『越の山風』は明治元年（一八六八）の戊辰戦争（北越方面）の回顧録である。山県が隊を離れた後に起こった「脱隊騒動」以外は、奇兵隊史をほぼ網羅していると言っていい。

長州藩という巨大な権力に、山県が奇兵隊をバックにいかにして対抗し、関与しているかを語っている点など、特に貴重だ。

たとえば、『懐旧記事』の藩内戦終盤近くの部分。敗色が濃くなった「俗論党」が鎮撫の名で、藩主世子を出馬させるとの風聞があった。「正義派」鴻城軍の井上馨などは動揺し、割腹して謝罪すると言い出す。これを知った奇兵隊の山県は、「正義派」は洞春公（毛利元就）の霊牌を真っ先に押し立てて進み、戦えばいいのだと言い出す。生身の世子に、紙切れ一枚で対抗するのだ。権威権力という、まやかしの持つ本質を冷静に見抜いていた山県に、恐ろしさすら感じてしまう。だからこそ、天皇制近代国家を樹立することが出来たのだと納得させられる。

一方、四境戦争のさい、幕府からも見捨てられ、なお長州藩と戦い続けねばならなかった小倉藩を称え、「其忠節を幕府に尽すに至りては当時只一の小倉もあるのみ…他日徳川幕府の為に其史を修むる者あらば是を大書特書して可なり」と語り、古武士的な一面も見せる。こうした「武士道」もまた近代日本の推進力だった。

山県だ、奇兵隊だというよりも、近代日本の出発点を知るため、不可欠の史料として、広くお薦めする。

歴史と詩文の才人
―山県有朋の実像を知る

東京大学教授　山内昌之

山県有朋ほど誤解されがちな明治の政治家も少ないだろう。大正まで元老として生き長らえただけに、原敬首相らの大正デモクラシーの敵対者というイメージが固定してしまった。

また、彼の出自が萩藩城下の卒族出身だったために、世間は彼の成功を成り上がりの典型として冷笑する傾向もあった。こうした偏見や先入観は、ともすれば山県の果たした役割を必要以上に貶めることにもなった。

確かに山県家は、長州藩の蔵元付中間として足軽以下の階級に属する軽輩であったが、その父有稔は藩に出仕して能吏の評価も高く、国学の造詣も深かった。父は有朋の教育に熱心であり、漢学や和学などの教養においても有朋は才を発揮したのである。

このことは、今回マツノ書店から復刻される『懐旧記事』や『こしのやまかぜ』などを読むと一目瞭然である。

『懐旧記事』は、他人の書いた明治維新史に満足せず自ら記憶を文章に起した作品であるが、近代の学問としての歴史学の手続きにも近い問題意識でまとめたふしもある。なかなかに見上げたものなのだ。すなわち山県は本の「緒言」において、口述筆記した原稿を自ら点検し、往事を回顧しただけでなく、遺漏を補い、一緒に行動した人物らに事実関係を問いながら、「尋繹参互（じんえきさんご）」して作品を完成したと自負している。

「尋繹参互」という表現あたりに、山県の教養がうかがえる。尋繹とは「たずねきわめる」、参互は

一比較する」という意味であるが、参互という語はすぐに清代の歴史家・章学誠のいう「参互捜討」を想起させる。史料を探して網羅しながら内容を比較する参互捜討は、近代歴史学の基礎につながる考え方であり、山県は一七三八（乾隆三）年に生まれた章学誠の学問を知っていたのかもしれない。

山県の歴史センスは、「懐旧記事」の第一巻巻頭にもうかがえる。

「歳月の経過するや其の迅疾なる飛丸もただならず。今日よりして三十余年前の往事を回想すればすでに歴史上の事蹟に属す」。

簡潔ではあるが、なかなかに歴史とは何かをよくとらえた一文というべきだろう。しかも、山県本来の文才や詩藻もうかがえるあたりが好ましい。

山県の詩人としての才は、『こしのやまかぜ』の題名に採られた有名な和歌に遺憾なく発揮されている。すなわち慶応四年五月、戊辰戦争のとき長岡攻めのために、新政府軍が小千谷から信濃川の対岸、榎峠と朝日山に展開する奥羽越列藩同盟軍を攻略しようとしたときのことだ。山県は奇兵隊以来の盟友・時山直八をこの激戦で失うことになった。この悲劇を哭するかのような名歌は、歌人山県の名を不朽のものとした。

あだ守る　砦のかがり　影ふけて　夏も身にしむ　越の山風

また、十年以上たっても、時山の墓に参った山県は、友の死を漢詩で追悼している。この詩もなかなかに情誼の厚さを示すものだ。

江声山色総相知　江声　山色　すべて相知る
路入越州思旧時　路　越州に入り　旧時を思う
泉下英雄竟無処　泉下の英雄　求むるところなし

蕭々故塁雨如糸　蕭々として　故塁に雨　糸のごとし

他方、山県は武人として、『こしのやまかぜ』において北越戦争を戦記として描くことを忘れていない。しかし、そこでも山県は索漠とした戦場の形勝をさりげなく詩のように点描している。これは人為ではなく自然の才の発露なのだろう。たとえば、朝日山をめぐる攻防戦の難しさも実に単簡に表されるのだ。

「天気は雨ならざれば即ち曇りにて夜間の如きは一点の星光をも見ること能はず、其の惨悽、殆んど言ふ可からざるものあり」。

今回、マツノ書店が復刻した山県有朋の書物は、軍人政治家の根底にひそむ歴史や詩文の才を浮かび上がらせた点でも好個の作品なのである。山県への好き嫌いを捨て等身大の軍人政治家を知る上でも絶好の史料というべきであろう。

■本書は幕末維新期における山県有朋の全著作、左記の五点を「続日本史籍協会叢書」の一冊として昭和五四年に東京大学出版会より刊行され、すぐに売切れ、三十年以上も入手困難でした。（それぞれの原本は戦前から入手困難）

①有朋の奇兵隊史『懐旧記事』二二四頁、②日記『葉桜日記』四〇頁、③北越戦出陣中の簡潔正確な手記『越の山風』二三八頁、④漢詩集『椿山誌存』二四頁、⑤和歌集『椿山集』一五〇頁。藤井貞文「解説」二〇頁も非常に充実。

■卓抜の文学的素養をもつ総指揮官が描いたこれらの作品は以前から高い評価を受けていましたが、今回の復刻を機に小社では「あらゆる幕末維新戦記の中でも群を抜く、お勧め本のナンバー・ワン」として、また「若き山県有朋を知るため唯一の文献」として自信を持ってお勧め致します。

■『越の山風』だけを復刻することも考えましたが、どうしても残りの四篇を捨てるに忍びず……、そのわけは、本書をお読み頂ければおわかりと思います。

本書が、永らく続いた「山県有朋についての大いなる誤解」を解消する一石になることを信じつつ。

■体　裁　A5判上製箱入710頁
■定　価　一万二千円（税込・〒別）
■予約特価　一万円（税・〒共）
■特価締切　24年1月20日（厳守）
■発売開始　24年3月上旬
限定三百部復刻（番号入）
▼書店不卸　▼締切厳守　▼返本OK
●申し込みハガキにある三点セット特価をご利用下さい。
山口県周南市銀座2～13
☎〇八三四㉑二九五　マツノ書店
URL http://www.matuno.com

偖余は一敗したる軍隊をして、悉く舊線に復して守備を嚴重にせしめ、最も防禦に困難なる地點には、奇兵隊を配置して之に備へ、本營を横渡に移して、全軍をして背水の陣を布かしめ、以て防戰に勗めたり。捷てば則ち得意自から驕り、敗るれば則ち沮喪徒らに怖るゝは、何れの軍隊に在りても殆んど免がれざる所、況んや訓練に乏しき當時の兵に於てをや。獨り我が奇兵隊は幸に多少の素養ありしを以て、此の敗軍の爲めに意氣沮喪するに至らざりしと雖ども、其他の兵は多く恐怖心を生じ、薩州兵の隊長にして、尚且つ一時此の方面を退却するの得策なるを云ふものあるに至れり。余は斷じて之を排斥したるが、今日の男爵西德次郎氏が、獨り余の意見に賛成し、今に及んで退却を云ふべからずと論じたるは、今尚余の記憶する所にして、當時の薩人中に於て頗る出

色の感ありしなり。

右の如き狀態にて、薩長兩兵の間兎角に圓滑ならざるの傾向あり、余と黑田とが、小千谷と柏崎とに分れ居ては、種々の不都合ありと考へられたるを以て、余は黑田に書を送りて、小千谷に來らんことを求めたり而して黑田は十四日に小千谷に來りたるも、病氣にて其儘薩の小千谷にある本陣に引籠り居たり。

余は多く横渡の陣地に在り、壘壁を增築し、疲兵を入れ替へ、日夜防禦に苦心したるが、十三日より長岡落城の當日卽ち十九日に至るまで、丁度一週間の間は、兩軍より打ち合ふ大砲小銃の聲、晝夜を通じて間斷なく、而して其間時々戰勢極めて激烈となり、今にも突貫の來るべき狀勢あり、傳騎を東西に飛ばして戰況を視せしむること、一晝夜の中に幾回なりしを知らず。官軍は一砲門につき、一日に百五十發を放射したる

内容見本
(70%縮小)

ことすらもありしなり。加ふるに天氣は雨ならざれば則ち曇りにて夜間の如きは一點の星光をも見ること能はず、其の困難、其の慘悽、殆んど言ふ可からざるものあり。只敵が官軍の朝日山を攻擊したる勢の猛烈なりしに顧みて、只管ら守備の方略を定め、敢然として攻め下し來らざりしは、實に官軍の幸福としたる所なり。誤つて世間に傳播したる左の拙什は、實に當時の口吟に係れり。

あた守る砦のかゝり影ふけて夏も身にしむ越の山風(註11)

敵に形勝に據られ、之を破ることは勿論、自から守ることも亦太だ困難なる上に、信濃川は益す張溢して、動もすれば爲めに小千谷との交通を絶たれんとするの虞あり。是に於て乎、余は當時關原に在陣したる

三好軍太郎(註12)指揮下の隊をして、平地より進んで河を渡り直ちに長岡城を攻擊せしめんと欲し、一日自から關原に至りて、親しく三好に余の意圖を示したり。

海道の本隊は、是より先き五月十二日卽ち板峠敗軍の翌々日を以て左の通り配置せられたり。

關原	薩半小隊　長一小隊　高田一小隊　加州二小隊　同砲三門
宮本	薩半小隊　長一小隊
妙法寺	長一小隊　富山二小隊　加州一小隊
坂田村	高田一小隊　加州一小隊
十日市	高田二小隊　薩三砲門
遊軍	薩半小隊　加州二小隊
北條	加州一小隊